

## 歴史的・地理的背景に観る世界衣服着形式の 移行及び変遷の研究

その1 紀元前3000年頃より紀元300年頃まで

高野和子

衣服の発生要因は大別して装飾的発生要因と機能的発生要因をあげるとは周知の互くである。しかし、これらが各々独自の要因のみにて衣服の発生をみたのではなく、この二つが中心要因として更に多角的に、総合関係によって生みだされた産物である。これを低辺として衣服の発生をみ、更に、気候・風土・材料・生活目的・民族性・時代性などによって、種々の服飾様式を造りだしてきたのである。そこで服飾、特に着形式を時代性と地理的要因を中心に古代より現代にいたるまでの流れを歴史地図を中心にして整理研究を試みる。その1)として衣服の発生頃より紀元頃までを今回の研究としてとりあげる。

人類が地球に姿をあらわしたのはおよそ50万年前と推定され、更に、火、言葉、道具等の使用により初期生産作業や共同生活をいとなみ初期の文化の芽をみたのは今よりおよそ8~6000年前頃である。

文明の起源はナイル河下流域、チグリス・エウフラテス河流域、インダス河流域、黄河流域を中心として四大文明圏が発生したことは周知の通りである。更に大別するならば、西洋文明圏(エジプト・メソポタミア中心)と東洋文明圏(中国およびインド中心)とに別けられ、各々自然条件、民族の相異により独自の文化の発達を示すと共に衣服の着形式も異なった流れを觀せていったのである。

時代的にみると、衣服の着形式が壁画、その他の図版によって調査できるのは新石器時代になってからで、それ以前、即ち、先史時代および旧石器時代のものは、その資料のないのと

共に、当時代の生活様式から考察しても、夏期はほとんど裸体に近く、また冬期は獸皮をまとったにすぎないであろうと調べられる。旧石器時代は自然物採集時代でありまた狩猟・漁撈時代でもあったからであり、ほとんど定着性もなかった。しかし時代が移るにしたがい人間は一定個所に定着するようになる。これは民族性と共に自然条件にもおおきく関係し、自然物培養時代(農耕・牧畜)となり新しい高度の文化を築くようになったのである。これが新石器時代(6000~3500 B.C.)である。自然物培養による生活は衣服の獸皮だけの生活から織物をつくりだし、ここに、織物による新しい着形式が生ずるのである。更に織物も自然条件により農耕のさかんな地域では、麻・綿等の植物性のものを着用し、牧畜のさかんな地域では毛を着用するようになる。しかし、いずれも初期の着形式は、腰巻衣がほとんどであることを意しておかなければならない。

新石器時代の世界の状勢は諸書の記すところであるので、ここには、衣服の着形式をその変化に関係する自然条件と民族について簡単に記す。ユーラシア大陸において、シベリア北部は極寒の凍地帯であり、アジアの南部、東部は湿润地帯、また北部及び西部は乾燥地帯で大陸性気候にめぐまれている。しかし乾燥地帯は高原・草地にめぐまれるが、シリア・アラビア地方やアフリカ北部は季節風のコースからはずれているため乾燥してほとんどが沙漠になっている。ヨーロッパ大陸は海洋性気候にめぐまれ、文化の根も容易にすえられた。

民族をみるならば、中国地域は、ほとんどが

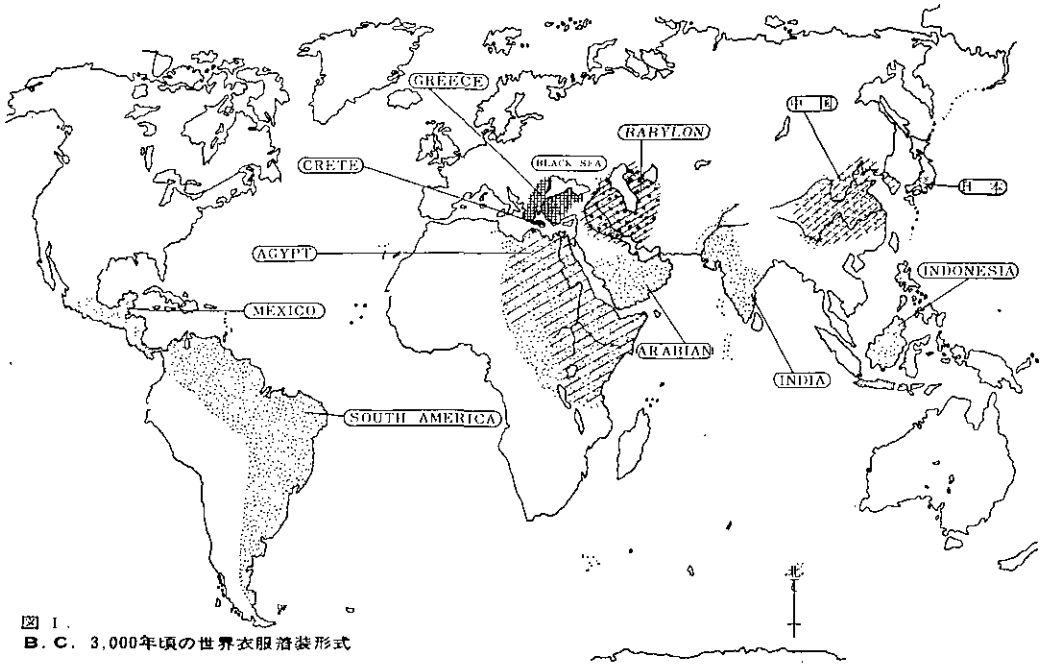


図 1.  
B. C. 3,000年頃の世界衣服着形式

凡 例

	腰巻き衣式		巻き衣式		二部式巻き衣
	袈沙衣式		貫頭衣式巻き衣		テュニック } 二部式 ズボン }
	貫頭衣式		袈沙衣式巻き衣		ズボン
	テュニック式(上衣)		二部式		腰布式テュニック

モウコ人類系統で、アルタイ語族（ツングース族、モウコ族、トルコ族）日本語族、支那・チベット語族（漢族チベット族）印度支那語族であるが、これらは単一なるものではなく、いろいろの要素を混合した、複雑なものが多い。インド地域では原住民としてはドラヴィダ族であるが、B.C. 2000年頃のインドヨーロッパ語族の一派であるインドアーリア族の侵入にあい後に混血して多様である。西アジア地域はセム語族（バビロニア人・アッシリア人）ハム語族（エジプト・リビア人）インド・ヨーロッパ語族（ペルシア・メデア人）がほとんどであるが、B.C. 2000年頃の頃、カッシート人、ヒッタイト人の北方よりの侵入にあい混血してこれも多様である。

以上自然条件と民族の概説をのべたが、時代と共に自然条件とのかっとうや民族間の戦いによる移動によって起こる衣服の着形式の変遷を、B.C. 3000年頃、B.C. 1000年頃、B.C. 500年頃、B.C. 300年頃、A.D.~300年頃をとりあげ図と共に研究をすすめる。

【 紀元前 3000年頃の世界の状況と衣服着形式（図）参照】

西アジアの北・東部は小アジア・アルメニア・イランの山岳高原地帯であり、南部はアラビア半島を中心に、東北アフリカに続く乾燥不毛の大沙漠・草原地帯におおわれている。この間にはさまれたティグリス・エウフラテス両河流域のメソポタミアから地中海沿岸のシリアパレス

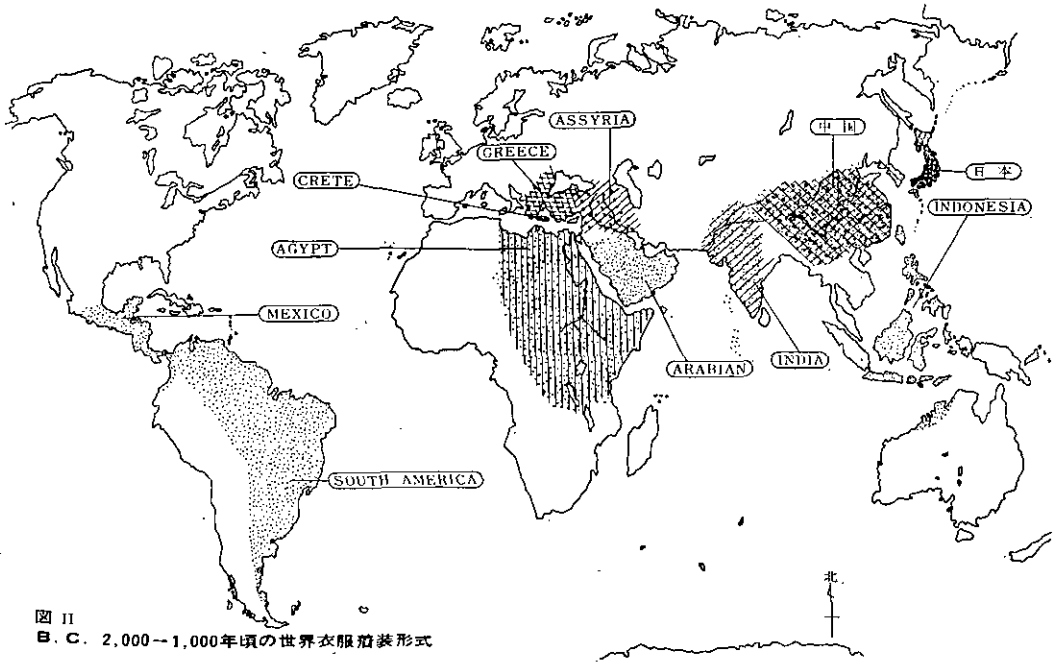


図 II  
B. C. 2,000--1,000年頃の世界衣服着形式

チナにかけて細長く発達した半月形の可耕地帯と更に沙漠の中の河谷に沿ってのスエズ地域はナイル河口の肥沃な三角州であるエジプトに接続している。このペルシヤ湾からエジプト南端にいたる帯状の緑地帯が古代オリент文明発達の主要な地盤となった。これは B.C. 3000 年頃には新石器時代 (6000 B.C.) の芽が萌芽したのである。この頃になりエジプト及び南部メソポタミアの低地は自然条件とあわせ多数の人口が定着し、農耕生活社会が成立し更に発達してエジプト及びシュメールという最古の都市国家が成立したのである。この当時の文化が青銅器文化である。また、メソポタミアの地形は開放的であったので周辺の未開民族は頻繁にこの沃地に侵入して大国家を建設し、シュメール人の文化は種々の民族によって継受され全西アジアに普及した。一方エジプトの地形は閉鎖的であったため外来民族との接触もほとんどなく外部からの刺激はなく、伝統的に支配され停滞していた。B.C. 3000 年頃統一されたエジプトは B.C. 525 年にペルシア帝国に併合されることになるまでつづくのである。エジプト地方は宗教心が強く、その文化は宗教と王の権力を中心にし

て栄えたのである。

エジプト服の初期は男子は腰布 (Shenti)、女子は腰布式チュニックの南方型であったが次だに権力・宗教・美感の発達によって刺激され、また自然条件に制約されながら着装様式は変遷していく。Shenti は細長い布を腰に巻く形式が中心であるが、張りのある三角形の前垂れのものも権威の象徴として使かれていたようである。しかし中帝国時代他民族との接触により着装は大きく変化した。女子の初期の腰布式チュニックは乳下からほぼ足先まで達するほっそりしたものである。男女共農耕中心の社会であったため麻布がつかわれていた。メソポタミア地方にはセム人、南部にはシュメール人、小アジアにはアジア系の人種、中央アジア・トルキスタン・インド地方にはアーリア人がいた。これらは幾たびか移動をくりかえし、他民族との接触融合は服飾を刺激・発展させていった。その中で比較的長い期間と勢力を得、独自の文化を残した最初はエウフラテス河上流のバビロンを都としたバビロニア王国 (2100 B.C. 頃) である。彼等の生活は牧畜で毛織物が中心に衣服が型ちづくられていった。バビロニア人の前身

であるシュメール人は下半身をおおう南方型の衣服、短い腰布やスカート式のを一様に装着していた。その中でも特に目立つのは房のたくさんついたカウナケス (Kaunakes) というスカート風の房のついた腰布である。バビロニア時代の前後して袈紗衣式巻き衣が出現してくる。これは農業牧畜が中心で織物の発達が進んだためともみられる。この他にスカートとテュニックとの併用等がみられる。

インド最古の文明はインダス河流域で、この文明圏は農耕生活が主体で程度は比較的豊かであったと思われる。これは Mohenjo-Daro 及び Harappa の都市の遺蹟 (3000 B.C. 頃) でも解る。インダス文明は、古代メソポタミア文明と著しい類似があることも遺蹟によって知り得る。衣服は腰布が中心であるが、B.C. 2000 年頃アリア人の侵入によってインダス文明は滅びたと推定される。

黄河流域を中心とした中国文明は殷によって最古の文明が開かれた。(1500 B.C.~1200 B.C. 頃) それ以前の衣服は獣皮を身につけ、織物が発明されてくると袈紗衣式・貫頭衣式装着がなされていたと思われる。これは当時の遺蹟等によって知り得る。

アメリカ大陸には旧石器時代の遺蹟はなく、新石器時代にアジアからベーリング海峡を渡って蒙古系統に属する人種がすんだ。これがアメリカ・インディアンの祖先で、始め北米のニューメキシコ及びコロラドに、南米のブラジルからアルゼンチンにかけて原始狩猟・採集文化をひろめたと推定される。当時の衣服は裸体か獣皮をまとい、または植物をまとったと推定される。この生活は6世紀頃まではほとんど変化なく続いたと思われる。日本・朝鮮については「紀要 1965 年号」に記載参照のこと。

いま一つ最古の文明の中心にクレタ島がある。住民は主として般乗りの放浪者で古くから先進文化国と接触し、すぐれた文化をきずいた。初期の男子は腰布、女子は腰布式スカートとテュニックであったが、B.C. 1800 年頃より自然界を相手とする生活様式そのままに芸術に反映

され、衣服様式も独特のものを造りだしていった。

世界全体として B.C. 6000 年頃より B.C. 3000 年頃にかけての衣服は原始服からの脱皮は生活条件及び自然条件によって制約され、あまりの変化はみとめられないが、農耕社会では麻中心、牧畜社会では毛織物が造られ、獣皮が織物に変わったということが特色で、形式の上では大きな変化はない。その変化は B.C. 2000~B.C. 1000 年頃にかけて大きく変化する。

## II 紀元前 2000 年頃~1000 年頃の世界の状況と衣服着形式 (図 II 参照)

B.C. 2000 年頃から印欧語族の分派は次々とバルカンを南にくだって、先住民と融合してギリシャ本土からエーゲ海一帯に分布し、除々にエーゲ文明及びオリエント文明を継受して、そこに血縁・言語・宗教・文化を等しくする一つの世界すなわちギリシャ世界の成立をみたのである。彼等は公共生活の場としてポリスを持ち、自己意識に目覚め、人間性の尊重と自由の精神、真理探究の精神を養い高度の文明を発展させた。このギリシャ文明に重大な影響を与えたのがクレタ島を中心とするエーゲ文明であったことは周知の通りである。B.C. 1400 年頃アケア人及びイオニア人はエーゲ諸島、小アジア西岸に移動し単なる模倣の文明をつづけていたが、先住民と融合し、更にクレタ文明の影響をうけ、B.C. 1500~B.C. 1200 年頃までに民族的特色をもったミケーネ文明を成立し、エーゲ海周辺一帯に拡大した。その後 B.C. 1200 年頃エーゲ海を中心に民族大移動が起こり、ドーリア人は南下してペロポネス半島の先住民を征服し、更にクレタ島・小アジア西岸に移動した。またバルカン東部の印欧語族の一部は小アジアに及び、余波はシリア・エジプト等のオリエント文明に大きな影響を与えた。B.C. 1000 年頃までにギリシャ人はギリシャを中心にエーゲ諸島・小アジア西岸に定着を終わったのである。エーゲ海は大小百余の島々が点在し住民の商業的發展に非常に便宜を与えたことも注意すべきことである。

エジプト地方は中帝国時代に入ってヌビアと

かシナイ半島など南国との接触にとどまり、閉鎖的であったために衣服は単に腰布の長さが上下するぐらいであった。しかし B.C. 1580 年頃新帝国時代に入って東方シリアとの接触によって衣服に対するエジプト人の観念をかえ、全身をおおうローブ式に変ったのである。これは男子は貫頭衣式カラシリスであった。しかし実際には腰布とカラシリスの併用がほとんどで、巻き衣が出現したのはその後 18, 19 王朝の頃であった。しかし初期の腰布は姿をけすことなく常にカラシリスの下、巻き衣の下に着用されていた。女子は西アジアとの接触により男子と同形のカラシリスまたはまといかたの自由な巻き衣が愛用されたものとみられる。その他にスカート・ケープ等の二部式のものも現われる。一方簡素をもって特徴とするギリシャ服は、精神と肉体とが完全に融合して生れる至上の美が表現されている。これは歴史的・地理的・民族的背景から生じたものである。ギリシャ人は自然を愛し、自由を愛し、民族を愛したのも美しい風光にめぐまれた共同体の中で育てられていったのである。その自然の中に審美性を見出し感受性を高めていき芸術性はより高まったのである。その中で初期のものは貫頭衣式であるが硬直した直線を愛好したのである。しかし、除々に権力の表示や宗教的な標識をすて美的感覚をおい求めそれをドレーブにみいだそうとしたのである。織り物もエジプトのものより更に発達し、麻の他に中国からの絹等がつかわれていた。このころの遺蹟はあまりないが、数点の作品から貫頭衣式巻き衣が着用されていたことは明確である。B.C. 500 年頃になると更に複雑になってくる。

クレタ島はクレタ人の平和と自由と美の環境の中で特別の制約もなく漸新な衣服形式に発展していった。胸は極端にくびれ、ベルト状の帯をしている。更に男女とも腰の張りに特徴をもたせ、女子はスカートとブラウス形式豊満な胸を露出している。男子は前代の腰布がそのままつけられるが B.C. 1000 年頃ドリス人の無理解な侵入にあいギリシャ人の巻き衣がこれに変

わる。

一方バビロン王国は紀元前 8 世紀後半アッシリアによって亡ぼされるが内乱や他民族の侵入にあい B.C. 609 年にメディアとバビロニアの連合軍によって亡ぼされる。アッシリア人は殺伐な民族で闘志に満ちた容ぼうとたくましい肉体はエジプトの影響を受けながら独自の文化を造り上げた。衣服は中国からの絹をインドからの木綿と自国の毛織物をたくみにつかい巻き衣式を更に工夫していたがドレーブの美を求めたものではなく、袖つけのピツタリしたチュニックと共に用いられていったのである。

中国では B.C. 1200 年頃、周が興こりはっきりした歴史時代に入る。衣服形式は前代と変わりなく、材料も絹等が多くつかわれていた。

中央アジアの草原で放牧生活を送っていたアリア人は B.C. 2000 年頃西北インドに侵入し先住民を逐ってインダス河北流域のパンジヤブ地方に定着し農耕生活に入った。B.C. 1000 年頃には東進してガンジス河流域に移り都市をたてるにいたった。衣服は前代とあまり変りはないが木綿が多くつかわれ、腰布、あるいは袈紗衣式まき衣・貫頭衣等がほとんどである。日本・朝鮮、他のアジア南方諸島は前代のままである。

この時代に注目すべき点はギリシャを中心に民族の移動は多かったが衣服形式の種類は多くはなかった。それは急に形式変化はないということである。ギリシャ・バビロニア地方等によくみられる状勢である。

### Ⅱ 紀元前 500 年頃の世界の状勢と衣服の着形式 (図 Ⅱ 参照)

北部インドで久しく分立をつづけていた小国家群はその後次第にまとまって 16 国となり、シヤカの頃 (B.C. 5-4 世紀頃) には統一に向かう前期形態的なマガダ国の諸朝の繁栄が現出した。アレクサンドル大王のインド遠征はインド統一の機運を作ったものでマガダ国をうばったチャンドラグプタ (Chandragupta) は大王の死後マケドニア軍を逐ってインド中央平原を統一

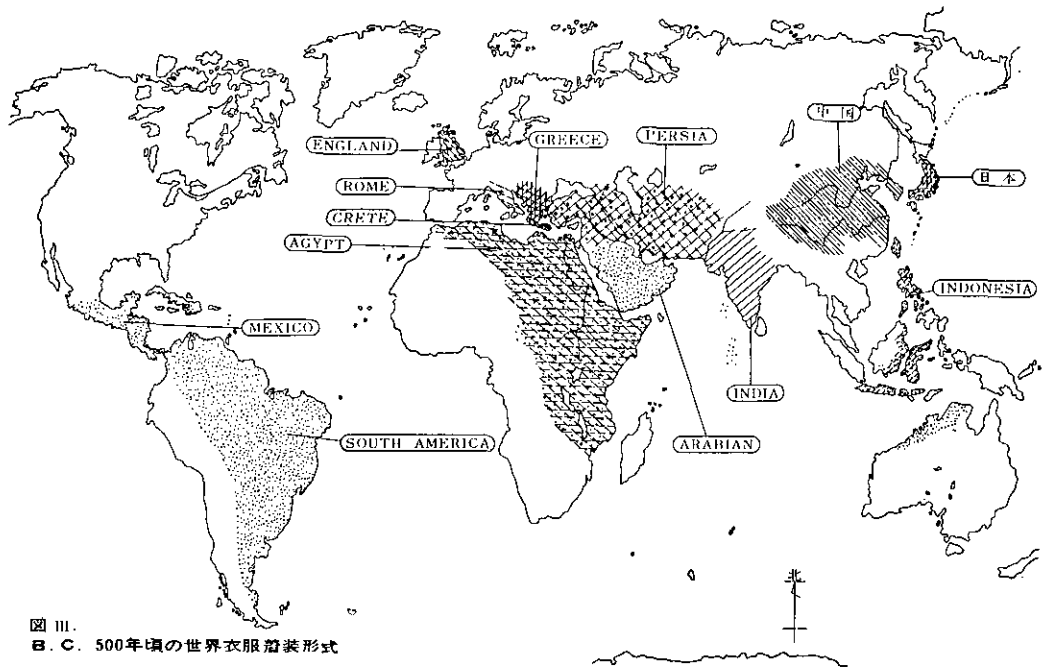


図 III.  
B. C. 500年頃の世界衣服着形式

し、シリアのセレウマン朝と対峙しこれと通好した。これがマウリア朝 (Maurya, 322-184 B.C.) である。インドの紀元前5世紀頃の衣服の着形式はアレクサンドロスによる統一の機運により西アジア等の影響を受け、袈沙衣式巻き衣がほとんどをしめるようになってくる。

中国地方は周の封建制度は諸侯の勢力の増大によって原始的秩序は解体の歩をたどり、一方漢民族、異民族の対争の姿があらわれ、B.C. 770年頃周は遊牧民の攻撃を契機として洛陽付近にうつり東周の時代となった。これより諸侯の勢力は強さを増し B.C. 403年頃までの春秋時代に入るのである。衣服着形式は周その他諸侯の興亡はあったがほとんど変化はないが腰布はほとんどみられず、丈の長めのチュニックと下着としてのズボンを着用していた。これは当時の絵画等によって解明される。

日本においても着形式にはほとんどの変化はなく、貫頭衣、袈沙衣式が着用されていた。

ギリシャにおいてはイオニア及び本土のポリスでは手工業が発達し、商人は船隊を編成して地中海沿岸各地と貿易を始めた。紀元前8-6世紀の約2世紀間に黒海沿岸、アフリカ北岸、南

部イタリア、シシリー島、南フランス等に多数の新植民地が建設され、ギリシャ世界は地中海域に拡大された。紀元前5世紀頃は民主政治の全盛時代で政治・経済・文化活動の最も旺盛活発な時期であった。

一方アッシリア地方は、B.C. 1800年頃インド人と別れたメディア人のイラン地方への移動による強い勢力と更にバビロニアとの連合軍のもとに亡ぼされ、更に隣国ペルシャをも圧迫し、後たびたびの興亡の結果紀元前6世紀前半ペルシャ大帝国が建設された。このペルシャ国の大部分を占めたのがメディア人およびペルシャ人でいずれも中央アジアを故国とするアーリア系民族で遊牧の民である。このペルシャが最もさかえたのは B.C. 550年頃である。地中海に拡大されたギリシャ世界は、必然ペルシャ帝国によって統一された東方世界と対立する存在となった。両世界の接触点は東地中海であった。西アジアを統一したペルシャ帝国は B.C. 600年後半に小アジアのリディア王国を滅して西岸のギリシャ植民地を征服した。このペルシャ帝国とギリシャ世界の対立したのが B.C. 492-448年のペルシャ戦役である。この戦役は紀元前4世紀アレ

クサンドル大王のペルシヤ遠征、紀元前3世紀のポニエの戦役と共に地中海を舞台をするオリエントとヨーロッパの世界史的な闘争であり、またヨーロッパ世界の勝利はヨーロッパ民族（ギリシヤ人・ローマ人）と古典文明が指導的地位を占るに至った。故に紀元前5世紀の世界はヘレネスの政治的経済的文化的活動の最も旺盛な時代となったのである。この様なギリシヤ世界での衣服は袈沙衣式巻き衣、巻き衣が中心に変せんし、織物も剪毛用のはさみの発見からもわかるように今までのむしり取りの毛織物より品質の向上したものを使用したであろうと推察される。その衣服は厳格なプロポーションを基盤とする調和美の中にむだな線や野卑な豪華さは少しもみられない。これは簡素美を誇るギリシヤ服の特徴でもある。一方ペルシヤでは西アジアの錯綜した服飾文化をまとめあげていたのである。袖つけテュニックとズボンのペルシヤ服と長くゆるやかなローブのメディア服が中心であるが、また更にいろいろ組み合わせられたものも多い。これらは特に優美とはいえないが原始的であるともいえない。それは袖つけテュニックも長ズボンも衣生活に最も考慮を必要とする寒地での生活から生じた技術的に高度なものであった。ここに北方形の衣服が姿を現わしてくる。このズボンもゲルマン人の移動と共にローマへ導入されていくのである。

エジプト・南アメリカ・メキシコは地域的に閉鎖的であったために衣服着形式はほとんど前代と変化はない。

この時代の特色として、ペルシヤ戦役によるオリエントとヨーロッパの接触によって衣服の着形式にはっきりした形式としてはあらわれないが、両者併用のきざしがみえてきたことは大きな特色であろう。次の紀元前3世紀になると更に明確にされることである。いま一つ、北方形式であるズボンがペルシヤ人によって芽をふいたことを記さねばならない。

#### IV 紀元前300年頃の世界の状況と衣服の着形式 (図IV参照)

B.C. 334年マケドニアのアレクサンドルはマ

ケドニア・ヘラス連合軍を率いてペルシヤ遠征の途に上り、小アジア、フェニキア、エジプトを征服してナイル河口にまでその勢力を広めた。地の後、ペルシヤ帝国を滅し、更に東進してインダス河を越えインドにまで達した。このことにダリギリシヤ文明はアジア・アフリカのいたるよに普及していった。そこで、東方固有の文化要素と融合して新しいギリシヤ風の文明が生まれ素レニズムの時代となる。このヘレニズム文明へ誕生とともに、B.C. 800年頃より歴史時代のり、その後固有の文明の発達をみなかった西地中海は一個の歴史的統一体を形成していった。その中心地はローマであった。南イタリアとシシリー島には、紀元前8世紀以後ギリシヤ人が多数の植民市を建設し海上に活動した。イタリア西岸に移住していたエトルリアはティレニア海沿岸を中心に海陸に発展した。またフェニキア人の植民地カルタゴは海上貿易により西地中海に勢力を拡めていった。イタリア半島には印欧語族のイタリア人が分布していたが、そのうちラティム平野に定着したラテン人の中の都市国家の中からローマが興った。ローマは最初はエトルリア、ついでギリシヤ植民地を征服してイタリア半島を統一したのがB.C. 300年である。そこでギリシヤ・イタリア文明を吸収してラテン文明をきづいたのである。B.C. 200年にはカルタゴを滅して東のヘレニズム世界に進出し全地中海に覇権を確立していった。ローマ人は争ってギリシヤの風俗や生活様式を模倣したため、一般に生活程度は著しく高まり、ローマの上下に奢侈遊惰の風潮を生じ、ローマ人の長所たる質実剛健の気風はすたれて享乐的となり道徳観念は失われ、一般に労働をきらい兵役を忌避する風を生じた。これが政治・社会と結びつきローマはA.D. 200年頃より衰弱、崩壊の道をたどるにいたった。この時代西欧の文化の中心であるローマの服装はギリシヤ服飾文化を土台として様式がつくられた。その基本となるギリシヤ服は、まき衣、貫頭衣式、袈沙衣式まき衣が中心である。その上にたつてローマは民族服であるトーガを造り出したのである。これは

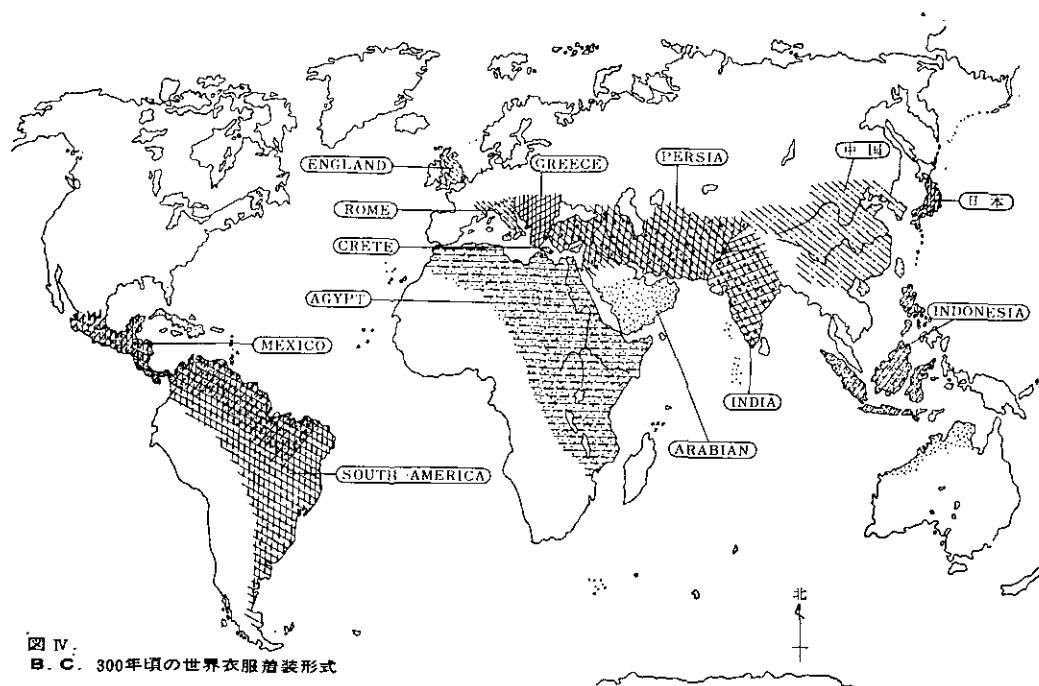


図 IV.  
B. C. 300年頃の世界衣服着形式

ギリシャのドレーパリーを継承し、完成したものである。ローマ服に現われる「威厳」「迫力」「量感」という特性をもち、地理的、歴史的環境より独特な社会制度による影響が大きかった。衣服着形式の中心は巻き衣でトーガといわれるものである。そこにはギリシャ的なドトープの優雅さはなく、また芸術性もなく、ただ重厚のみの「いげん」さだけであった。衣服の材料はこの地が牧畜に適していたことから毛織物を使用し、また毛、麻、木綿等をも他国からの輸入などで種々あった。トーガの他に、テュニックと一片の布による袈沙衣との組み合わせも着用されていた。

インド地方はその後マウリア王朝は急速におとろえその後、北インドは再び分裂した。衣服はアレキサンドル遠征の影響で西アジアの影響が強く入ったが袈沙衣まき衣、貫頭衣、テュニック形式がほとんどを示め、その形式はあまりの変化もなく現代にまでいたっているのである。

中国地方においては漢族と最も活発な接触をなしたのは匈奴であった。匈奴はトルコ系とも蒙古系ともいわれるアジアの乾燥地帯を舞台と

して活やくした遊牧民で、紀元前3世紀から約500年にわたって高原の支配者となった。彼らは西北アジアの騎馬民族スキタイ文化の影響を受けて好戦的な民族となり、中国の戦国の頃には北辺の諸国と交易したが漢民族をおびやかすことはしばしばであった。この時代の服装形式はテュニックとズボンの二部形式であった。日本においては前時代のままの着装をしていた。朝鮮においては中国の服装形式とほとんど同じであった。インドネシア地方では、民族の移動がはげしかったが遺跡によるとほとんどが腰布だけであった。

一方ペルシヤ地方は前時代につきローブを着用していた。これは貫頭衣のきやすさと巻き衣の美しさをあらわさんとしたものであるがギリシャの優雅さには及ばなかった。

アフリカ・エジプト地方は、民族による侵略等があったが、地理的・気候的条件に制約されて、あまりの衣服の変化をみとめることはできない。腰布がほとんどであるが腰布とまき衣の組み合わせも行なわれていた。

以上紀元前3世紀頃の衣服の着形式を記したが、注目すべき点は、ローマの地中海沿岸の



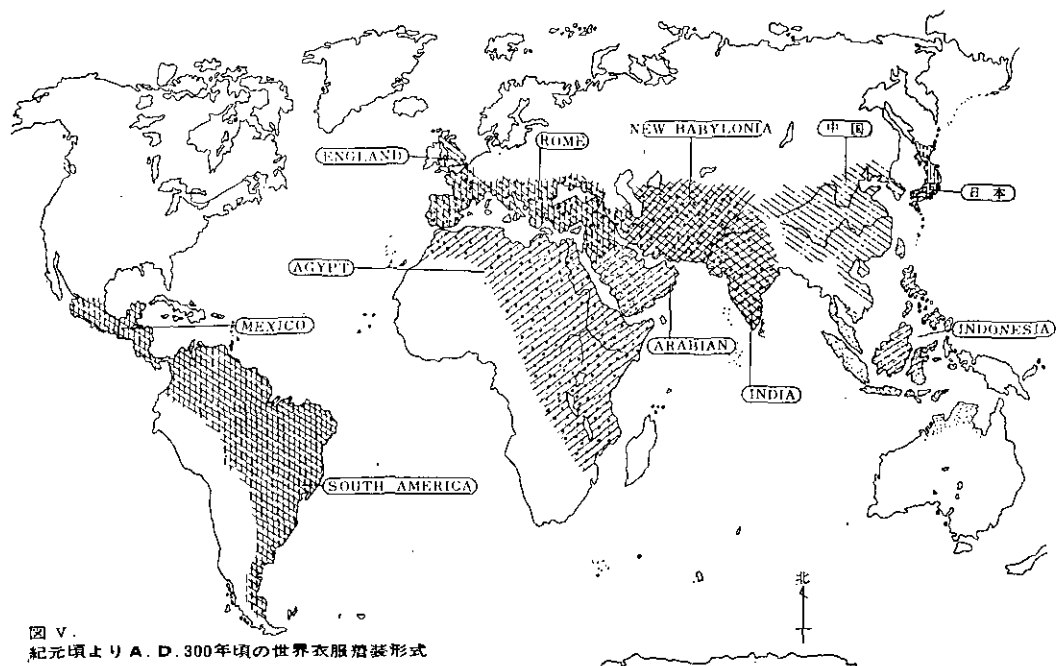


図 V.  
紀元頃より A. D. 300 年頃の世界衣服着形式

支配による、トーガ服の普及である。あらゆる地方には前時代の衣服形式がのこっているのであるが、その上にトーガという新しい形式が組み合わされたのである。これが次代になるとテュニックとトーガ、テュニック・ズボン・トーガの組み合わせて発達し巻き衣の最盛期となったことである。

#### V 紀元頃より 300 年頃の世界状況と衣服の着形式 (図 V 参照)

その後ローマはアウグスツス時代に (30 B.C. 14 A.D.) は動乱の中にあつて最終的に統一され東、西地中海、オリエントの三大世界を統合した複雑かつぼう大な世界国家となった。しかし 2 世紀末頃よりローマ帝国は社会経済の変動と軍人勢力の跋扈、ゲルマン人の侵入によって次第に衰弱、崩壊の道をたどった。西ローマ帝国は 476 年ゲルマンの侵入によって、東ローマ帝国は 1453 年オスマン・トルコの侵入によって滅亡した。この当時の衣服はテュニックと巻き衣式のトーガとの組み合わせがほとんどであるが、紀元頃にかけて貫頭衣式テュニックであるトウニカだけの着装が目立ってくる。女子の場合は常にトウニカとマント風のストラによって

占められていた。

またインド地方では分裂がつづいたが、グプタ王朝 (320-520) によってなされ寛容な政治と盛んな通商とで国力が充実しインド文化の黄金期を向えるいしづえとなった。衣服の着形式は前代のものがつづいているが貫頭衣式のドレーパリーが着用されはじめる。

インドネシヤ地方では A.D. 100 年頃インド人が東インド諸島に定住しヒンドウ文化を滲透させ、また中国との商易をするようになる。衣服の着形式は貫頭衣式上衣と腰布の組み合わせがほとんどである。台湾におけるパイワン族、ダイヤル族も同様の着装をしていた。

中国においては、B.C. 221 年秦によって統一されたが、再々の分裂の後、A.D. 25 年に光武帝により再び天下を統一した。しかし、地方豪族の大勢力の生長は国力を衰えさせ 220 年に群雄割拠の世となり漢は滅亡していった。この時代の中国の文化は神仙思想的なものも多く、また儒教的な題材も少くはない。おのずと衣服もその傾向が強く神仙感覚のおりこまれたものが中心であるが、着形式は前代と同様長めの巻き衣式テュニックとズボンの二部式であった。朝

鮮もほとんど同形式である。

日本では A.D. 250 年頃より古墳時代に入り、テュニックとズボン、あるいはスカートの二部式にかわるが、中国の着装よりまだまだ初期的段階のものであった。

メキシコ・南アメリカ等はほとんど他国との交流もなく、前時代のままの着装形式である。

アジア・オリエント地方はゲルマン人の大移動が起るまで、テュニックと巻き衣あるいは袈裟衣式巻き衣がほとんどの着装形式であるが、ゲルマンの侵入により、5世紀頃より民族と共に衣服の着装形式は大きく変化するのである。

この時代は歴史的にはローマの衰退、中国の分裂等の問題があるが衣服の着装形式にはほとんどの変化はなく、ただ日本の二部形式が目立つだけで、形式のけんたい期ともいわれる時代である。その後ゲルマンの侵入により衣服の着装はヨーロッパを中心に大きく変化を見るのである。それは次回論文とする。

## Ⅶ 古代衣服着装形式変遷要因

以上、地図図解を中心に時代別に衣服着装形式の変せんをのべてきたが、その要因は何であるかを古代を総かつしてまとめると

1) 地理的・自然的条件による変遷要因、これは衣服の発生とも関係をもってくるのであるが、時代が古代へさかのぼればのぼる程、自然条件による影響は大きい。何故なら特別の着装様式を知ることのない民族は、暑い時には裸体、寒い季節には毛皮をまとったことから理解される。更に季節的な問題だけである地域的な条件からも前述と同様のことがいわれる。エジプト地方、アフリカ地方はその例である。

2) 民族的条件による変遷要因、古代社会は民族の移動がはげしく、常に原住民と移民族間の戦いはたえることがなかった。更に勝者は敗者をどれいとし、勝者は自由として上位に君臨したのである。勝者は勝利のよろこびと威厳とを衣服にもとめたことは当然のことである。その衣服は原住民と移民族独特の様式が融合し新

しい衣服形式へと変遷していくのである。この例はバビロニア・ペルシヤ地方にはっきりと見出すことができる。

3) 歴史の流れの中で発生した文化による変遷要因。ギリシヤ、ローマ、中国等にみられるもので、民族の移動と共に勢力を得た民族は彼らの政治、社会秩序を制度化し、よりすぐれた文化生活を営もうとする。それは植民地等による勢力の増大とともに新しい世界観と文化を築きあげる。おのずとその影響は衣服の上にもあらわれ着装形式が前時代と異なってくるのである。

4) 衣服の素材、織物の発達による変遷要因。衣服の素材は初期において自然条件に左右される。農耕社会においては麻・綿が中心、牧畜社会においては、羊毛が中心であったが、時代がたつにつれ、民族の移動、他地域との海上交通、陸上交通によって素材は一定地域のものだけではなく、羊毛、麻、綿、絹等の素材の自由が衣服の様式を変へていった。一方織物の発達も着装形式を変へたことも忘れてはならない。初期の技術は幅のせまい小幅織物しか織られなかったが、織物技術の発達はギリシヤ時代には広幅織物の発生をみたのである。小幅織物による着装形式はおのずと単純なものであったが、広幅織物の発達は複雑・優雅・威厳のある巻き衣式を中心とする着装形式の発達をうながしたのである。

以上、地図を中心に、古代衣服着装形式の変せんを調べた。これが A.D. 1000 年頃までには更に大きな変遷をみるのである。

## 参 考 図 書

- 最新世界歴史地図  
 世界史の研究 吉岡 力著  
 西洋服飾発達史 丹野 郁著  
 世界美術大系 全巻 講談社版  
 Carolyn G. Brady: Western World Costume  
 Blanche Payne: History of Costume